

八月三日

このところ、何故か気持ちにゆとりが無くて、このメモも少々雑になっていた。五日からロシアに行かねばならぬので、しておかなければならぬ事が山のようにあるのだが、少ししか手がつかない。時間の空白は必需品だな。十一時研究室、十五時迄雑事打合わせ。その後、世界の住宅価格比較ゼミ。十七時半迄。十八時半磯崎アトリ工。鈴木博之先生と久し振りに会う。磯崎さんと批評と理論の会の展開方法に関して話し合う。十九時半、旧森ビルの何階かの寿司屋で会食。磯崎さんはイモ焼酎、我々は冷酒を飲む。批評と理論の会は何はともあれ続行しようという事になる。

第一段階のくくりは磯崎新と一九六八年革命（騒乱）とする事になった。この主題はハードである。二十二時過会食修了。磯崎さんと別れ、鈴木さんと地下鉄へ。鈴木博之が君はこちらの電車、俺はこちらと自信満々に指示するので率直に従って、鈴木さんと反対側の車輻に乗ったのが運の尽き、俺も馬鹿で洗足の先まで乗ってしまい、ようやくこれはおかしいと気付き、つばめ返しどころではなく愚鈍なイタチ返しのおく、きた道を再び戻り山王溜池、つまり先程、鈴木博之と別れたところを越えて数駅戻り、更に乗り継いで、只今二十三時半都営新宿線を経て京王線に辿り着いた。もしかしたら鈴木博之先生も逆方向の電車に乗ったのではないか。坂口安吾の小林秀雄評だったか風博士の短文を思い出した。小林秀雄と汽車に乗って、二人共少し酔った。途中駅で降りる安吾の

荷物を俺が持つてやると、プラットフォームまで運んでくれた。じゃ、サヨナラと小林の乗った汽車を見送ってささと気が付いたら、そこはプラットホームではなく細い荷台のような所で、反対側に立派なプラットホームがあつたという話。そこで安吾は風に吹かれて立ち尽くし、笑つたらしい。記憶が定かではないが、そんな事があつたと言う。精密な頭脳を持つ人間は時に無意識の中にポカリと何かが抜けることがあるという事だろう。こういう事があるから人生は時に面白い。